

空き民家利用し「関学カフェ」

丹波市柏原

総政演習受講生



関学大総合政策学部の「都市政策演習」(担当・角野幸博教授、客野尚志准教授)の受講生が、兵庫県丹波市柏原地区の活性化を目指して、10月11、12日に行われた柏原地区の恒例行事「織田祭り」と「うまいもんフェスタ」で、空き民家を利用した「関学カフェ」をオープンした。

総合政策学部では今年3月、同地区と連携し、空き民家を活動拠点に、地域活性化イベントへの参加や定期的な住民へのアンケート、ヒアリング調査などを実施してきた。今回のカフェ運営もその一環。

「織田祭り」と「うまいもんフェスタ」は、丹波の秋の味覚を楽しむことができる屋台のほか、武者行列などを実施し、毎年多くの観光客でにぎわう。関学カフェでは、丹波の名産、黒豆を使用したうどんや栗カシ、全国菓子博覧会で金賞を受賞したことのある「かち栗最中」や、地元丹波の大豆の黒大豆を使った「黒南蛮」などを提供。カフェ運営と同時に、柏原のまちづくりのテーマである「ロマン城下町柏原」にふさわしい写真を、イベントの来訪者を選んでもらう「来訪者街並みイメージ調査」も実施した。

大阪府から観光に訪れていた野田和幹さんは「学生さんが地域に入り、活動しているのは、新鮮でいい。今後も継続して頑張ってもらいたい」と話していた。カフェ運営もその一環。

台北の茶葉専門店「台湾茶エスタ」の朴史帆さん(総2)は「お客さんからさまざまなアドバイスをもらって、お湯の入れ方や茶葉の量、ドライフルーツのほか、学生手作りの杏仁豆腐やマンゴプリンなどのデザートを提供。地元の人を中心に、多い時には一日40人が来店し、利益もあげることができた。」

台湾茶の実験店「花カフェ」

甲子園口 女子学生5人が開く



関学大の学際ゼミ「ベンチャー創成塾」を履修する女子学生5人が、10月16日から11月14日までの毎週日曜日に、甲子園口商街で、台湾茶・工芸花茶の店舗運営の経験を生かして、将来、ベンチャーを育てる仕事などができたらと話している。

学生による起業促進や台湾の伝統茶文化の紹介を通じて、国際交流、商店街の活性化が目的。今年8月に台湾へ調査旅行へも出かけ、

エスタの朴史帆さん(総2)は「お客さんからはさまざまなアドバイスも頂きました。今後も地域の期待に応えていきたい」と話している。カフェ運営もその一環。

台北の茶葉専門店「台湾茶エスタ」の朴史帆さん(総2)は「お客さんからさまざまなアドバイスをもらって、お湯の入れ方や茶葉の量、ドライフルーツのほか、学生手作りの杏仁豆腐やマンゴプリンなどのデザートを提供。地元の人を中心に、多い時には一日40人が来店し、利益もあげることができた。」

地域活性化



観光名所を巡る「ループバス」運行

宝塚 学生16人、音楽回廊で

関学大の学生16人が、宝塚に新たな呼び物を作ろうと、阪急バス(株)の協力を得て宝塚の観光名所を巡る「ループバス」を運行した。

11月14日(土)に催される宝塚の音楽イベント「宝塚音楽回廊」に合わせたもので、音楽回廊のコンサート会場を結ぶ交通手段を作ること、宝塚のまちの魅力を広めるのが狙い。

この取り組みは、宝塚の活性化を目指す関学大の授業「地域フィールドワーク(宝塚)」の一環で、今年2回目の実施。昨年度はこの企画が、経済産業省主催の「社会人基礎力育成プログラム」コンテストにおいて準大賞を受賞。学生たちは運行ルート設定やバス会社との交渉のほか、バス

のラッピングや車内広告のデザイン、バスドライバーの募集など、さまざまな準備を進めてきた。

バス内では、市民バンドが、生演奏も披露し、音楽ジャンルによって分けられる宝塚の音楽イベント「宝塚音楽回廊」に合わせたもので、音楽回廊のコンサート会場を結ぶ交通手段を作ること、宝塚のまちの魅力を広めるのが狙い。

この取り組みは、宝塚の活性化を目指す関学大の授業「地域フィールドワーク(宝塚)」の一環で、今年2回目の実施。昨年度はこの企画が、経済産業省主催の「社会人基礎力育成プログラム」コンテストにおいて準大賞を受賞。学生たちは運行ルート設定やバス会社との交渉のほか、バス

生協のリサイクル弁当容器を回収して、発展途上国の子どもの支援をする「サクルRING」に、9月から交換留学生が加わり活動の幅を広げている。

留学生は、9月に米国から来日したブライアン・パターソンさん(人2)が留学生と一緒に受けている授業で知り合った。

パターソンさんは医師を目指し、米国では学業の間に病院や老人ホームでボランティアをしている。「米国では学生がボランティアをするのは当たり前。日本にはなぜボランティアに興味がないのかと思う。サクルRINGのメンバーはパワフル。日本でいろいろな経験ができて楽しい」と話し、積極的に活動に参加している。

留学生への取り組み活発に



国際学部が来年、新設されるのを機に、関学大の各学部では、留学生に対する取り組みが活発化してきている。

国際学部では、留学生に対する「外国人留学生懇談会」が行われている。事前のアンケートなどで留学生の日本生活に対する悩みや不安を聞き、教職員で情報を共有。懇談会で相談する場を設け、留学生が魅力的に思える環境作りを目指している。

人間福祉学部では、社会学部の取り組みを基に独自の留学生懇談会を開催。留学生・教職員・学生が一体となって、悩み相談に応じている。会では、ゲームなどを盛り込みより楽しんで参加できるように心がけている。経済学部は、留学生からの「日本人と交流する機会をもっと持ちたい」との要望を受け、今年7月、初めての試みとして一般学生と留学生が交流できる場「留学生との交流ランチタイム」を開催。

弁当容器を回収 交換留学生も参加

サクルRINGは、リサイクル弁当容器を回収すれば10円が返金される「デポジット制」を活用、昨年4月から今年7月までに2万8008個が集まり、WFP(国際食糧計画)を通じて、600円分を回収、募金も5384円集まっている。

各学部、悩み相談や交流会

屋外休憩室を利用し、立食形式で開く。当日も自由に参加ができたため、30人ほどが集まり好評だった。来年以降も1回の開催を予定している。

「コミュニティメディア工房」開設

総政・山中ゼミ「エフエムワイワイ」と連携



総合政策学部メディア情報学コミュニティメディア工房(神戸市長田区)が連携するエフエムワイワイ(同局内に「コミュニティメディア工房」を開設した。

学生たちは、メディアの授業の一環として、この工房で局のスタッフたちの指導を受けながら、FMわいわいがめざす多文化共生の理念と実践について学ぶ。同時に、ラジオ番組の制作を体験したり、プロドキュスターとして生番組の放送に関わったりして、総合的なメディア技術を身につける。制作した番組は、FM地上波とインターネットでも放送していく。

山中ゼミは、これまでも同局の協力で、学生による番組制作、放送するなどしてきた。工房を開設したことで、協力関係をさらに強化し、地域とも連携したメディア教育に力を入れていく。ゼミ長の青山寛幸さん(総3)は「機器の知識などはほとんどないので、これから工房でいろいろなことを学びたい。情報発信を通して、地域を盛り上げた」と期待している。

高等部数学研究部 国際学会で査読付き論文発表へ

高等部数学研究部の生徒が中心となったグループが12月14~17日に福岡で開催される国際学会で査読付き論文を発表する。学会名は、計算機学と数学の関係を研究する国際学会「The International Conference on Mathematical Aspects of Computer and Information Sciences」で論文「Discrete Mathematics and Computer Algebra(離散数学と計算機代数)」を英語で発表。著者は、山内俊幸さん(理1)と高等部1年の西村幸一朗さん、井上泰志さん、泊祐樹さん。高校生が国際学会で査読付き論文を発表するのは珍しいという。11月には京都大学数理解析研究所の研究集会で同じメンバーが発表している。数学研究部の研究は、さまざまなところで評価されていて、セルビアの国立数学研究所が発行する雑誌「Visual Mathematics Volume 10 No.10 2009」に、前号に続いて掲載された。論文のタイトルは「Combinatorial Games and Beautiful Graphs Produced by them。」(組み合わせゲームとそれから作られる美しいグラフ)。論文の著者は、内藤昌宗さん、巽創さん、西村幸一朗さん、井上泰志さん、泊祐樹さん、中岡拓磨さんと高等部卒業生の山内俊幸さん、松井啓史さん。